

# 大陸(朝鮮)

## 三度目の幸運 北朝鮮より復員

福岡県 持山 恵 亮

私は大正十四（一九二五）年、分家して四代目の往還の「はしもと屋」の長男として生を享けました。家は煙草、駄菓子を売る店で、二階は宿屋をしていたようです。裏は小学校の運動場に接し、講堂の前には魚型水雷が飾ってありました。

小学校に入学して間もなく、家事の都合により家は本家に預けて故郷を去り、言葉、風習も違う山奥の小学校に転校しました。この小学校は複式学級で全校百二十六人、教室は障子張りでした。

父は、十八歳の時に祖父を亡くし「貧乏しても本家は大切にせよ」と口癖のように言っておりました。酒と腕相撲が強い筋の通った小柄な真面目な男でした。そして叔父（父の妹婿）の取り計らいで木浦鉦山開発の責任者となりました。いよいよ錫の鉦脈が発見され、作業員も増加し部落に電灯が点き、旅館、飲食店もでき小学校の生徒数も二百三十七人までに増加、校舎は二階建てになりました。

母は兄一人の長女で、内業として松葉かきをして燃料として博多まで舟で卸しに行っていました。また尋常科を出たばかりで老舗商家「紙よ」に奉公に行ったことから子供の躰には厳しく、私には常に「男は読み書き、ソロバンができんとイカン

バイ」と言っていました。

新しい小学校の校舎に入る間もなく尋常科を卒業して、福岡の叔母宅で従兄弟と高等小学校に通うことになりました。その頃、寄宿舎のある福岡師範学校への進学を考えたのですが、叔父から「来年、師範学校を受けるのなら、その前に場馴れのために福岡商業を受けて見よ」と言われ、受験することにしました。計らずも合格したのですが、従兄弟と同居の生活は嫌とも言えず仕方なく入学することにしました。

入学した上は負けられません。母の言葉を思い出し珠算部に入り、試合にも何度か出場致しました。そのころから戦局も激しくなり、校内も軍色が濃くなりましたので運動は剣道部、銃剣術部に入り、これが後になって役に立つとは思いませんでした。

その中に従兄弟達も卒業して上京してしまい、

私は別の叔母宅に下宿代も決めて住むことにして、これまでの叔父の家での居候の身から解放されました。

ある日炊事場で滑り、右鎖骨を折り、学校では“軍事教練”には参加できず、配属将校の評価は「通信簿」では最下位の「丁」となってしまいました。

三年生の暮れの十二月八日、米国との戦いが始まり、校内では八十四キロ行軍、兵営宿泊体験、芦屋飛行場作りの勤労奉仕、体力章検定などがあり、予科錬や特幹に応募する級友は十八人も出るようになりました。私も血気に走り、親の了解なしで予科錬を志願しました。在学中に松山航空隊に入り憧れの七ツ釦を着用する前の適性検査で右眼の視力が落ちて不適合となり帰郷を命ぜられました。

「予科錬だけが御国の為ではない。まだ現役があるではないか」と優しく諭され別府港から夜中に我が家に涙ながら帰宅しました。

翌日、母に連れられ眼科医院に行きました。先生の話では実は扁桃腺肥大の手術をした後遺症により、右眼が化膿した「虹彩炎」であったとのことで、その後、毎日通院して眼球注射などで数日で完治し、視力も左眼と同じまで回復しました。

学校の卒業式に行くと、今度は海軍の水路部があるとのこと、今度は両親の同意をうけて応募し「昭和十九年一月十七日、出頭せよ」との公用通知がきました。伊勢神宮参拝を行った上で小田原駅に下車、合宿指定の寺に無事着きました。

ここ水路部での作業は小さな気球を上げ、それを六分儀で追い、地上レベルによって風向、風速を測る実習所でした。そのうち父より「ウナカエレ、チチ」との電報があり、早速、荷物を整理して帰宅しました。帰宅すると一緒に入部したM君が「持山君は長男じゃろう。実習が終わると太平洋上の離島に回され、観測所勤務となり、いつ帰れるか判らんようになる。早く呼び戻しなさい」

とわざわざ話に来たことが原因で、父が私を呼び戻したことが分かりました。

三月末頃また彼が来て、今度は海軍飛行機の部品を作る軍需工場が新しく「幹部技術養成所（幹技生）」を開設するので行かないかと誘われ早速入所しました。

総員二十人で全寮制、東中州に近い「潮来」という大きな料亭が養成所に開放されていました。教科は金属名、ノギス、マイクロメーターの使い方などで三カ月で終了して係員となり、社員に登用されて基本給四十二円でした。

工場は職工、女工、徴用雇用員、そして女子挺身隊の日の丸の鉢巻が目立ちました。我々「幹技生」は短期間で職員扱いになりましたので工場内では憎まれ者でした。私は工務係員として仕掛品の工程計画係となりました。

昭和十九年六月十七日、香椎駅近くに爆弾が投下されました。そのうち、私ら「幹技生」にも入

隊通知がきはじめました。工場も白木原に疎開するため建設に行くようになった時、私にも「四月一日、朝鮮第一〇四部隊入隊のために東公園に集合せよ」との令状が参りました。

当日、東公園に集合し二等兵の襟章を縫い付けました。大学前の泉屋、石田屋旅館が指定宿舎で、持ち物と頂いた餞別等現金を上司に預けました。翌日、博多港にて乗船、上空より護衛機に護られ、無事釜山港に着きました。釜山駅よりは有蓋貨物列車で、広軌ですから広い車内に藁を敷き、揺れながら一夜が明けました。行き先は咸鏡北道会寧と知らされ、ソ満国境の近くだし寒かろうと想いつつやつと駅に着きました。外の空気は明るく背伸びするまもなく兵舎へ向かいました。飛行場の左側に兵舎があり真正面に大きな菊花の御紋章が光り輝いていたのが今でも臉に残っております。

内務班は第三中隊第五班となり軍衣二、三装の各被服受領、編上靴は大きければ足は靴に合わせ

ろと、そして早く休め、明日は身体検査だ、寝床は藁布団で起床ラッパ、点呼、食事で一日が始まりました。

忙しく一日、二日、三日が終わると翌朝、「お前達は昨日まではお客さんだった。今日からは兵隊だ」と気合が入りました。午前中は訓練、飛行機構造講義、午後は山腹に掩体壕造りである。蛸つぼ掘りでは一尺程掘るが、翌朝には凍ってしまい、また昨日と同様の骨を折る。外はこのように厳寒であるが、兵舎の窓は二重張りで内にはペーチカがある。

中隊対抗銃剣術大会がありました。私は班代表に指名され、勝負は別として、班外特に中隊で名前を良い方に覚えられました。

抜き打ち一品検査があり、巻脚絆の手入れが悪ければ頭にターバンのように巻かされ、靴紐の洗いや不十分では、口に食わえ「××二等兵は……のため各班廻りを命ぜられました」と。

床や頭上の衣類整理棚の整理が不揃いの時は、班長が木銃で跳飛ばし「会寧のそよ風に吹き飛ばされました」である。

久々に我が家と、Sさんから慰問文が着きました。Sさんの手紙は班内発表となり、読むうちに先は何と書いてあるか不安で、少し飛ばして読み上げると、「飛ばしところが、読み直せ」「ハイ」である。

誰かが「アア！ やっと一日終わった！」というものの「馬鹿タレ！ ここは娑婆と違うぞ」である。

消灯ラッパが静かに鳴りひびく。夢の床に就くや、コツコツ週番下士官が巡回しつつ銃の引金点検である。次々と引く。俺は何番目：「よかった」と思う。「カチン」と鳴ると「〇〇出てこい」で捧げ銃をして「三八式歩兵銃殿、長々と……致しまして申し訳ありません」である。軍隊は馬鹿にならないと勤まらない。

発熱すると錬兵休となり洗濯物干場の見張番で

ある。ある洗濯場で石鹼を忘れ、横の者に「石鹼貸さんや」というと、横の者は俺の班札を見て「貴様四月兵じゃろうが、なめるな」とくる。相手は三月兵でした。

三カ月過ぎ、幹候の試験がある。まず口頭質問「お前の本分は」「ハイ忠節を尽くすを本分とします」

「ヨシ、次。戦陣訓の一部を言え」「ハッ『必勝の信念』信は力なり自ら信じて毅然として戦う者常によく勝者たり」「ヨーシ」となる。

八月に入るとA班長は転属を命ぜられ「持山、お前幹候合格内定したようだ、立派な将校になつてくれ」の一言が最後の別れとなりました。

八月九日前後、「この部隊は戦隊と交替するので完全武装して転進の準備をして営庭に集合せよ」となり、無蓋貨物列車で会寧駅を後にして咸興か石家荘か？ 判らぬまま進みました。その時ソ連との交戦を知り、途中ソ連軍の攻撃を考慮し

て、ある駅より狭軌の支線に入るため積み替えを  
しました。

また、幹線に戻り、各駅に停車しながら南下し  
ていると、ある駅で「日本負けたよ！ 戦争終わ  
ったヨ。負けた！ 負けた」と叫びながら近づき、  
中には日の丸を「お玉杓子」のように染め替えた  
旗を持った保安隊が民間人の治安に当たっており  
ました。

南下して京城（ソウル）を通過し、着いた駅は  
太田でした。太田高等女学校の校庭に全員集合さ  
せられ、また移動かと不安に思っていたところ、  
H部隊長より「八月十五日終戦の旨」伝達されま  
した。

我々は無事内地に帰還し直ちに正業に就き、仕  
事に精を出すよう訓示があり、武装解除となりま  
した。銃の御紋章は鏝で削り落とした時は感無量  
でした。帰舎すると食糧豊富で食べ飲み放題で帰  
還の日を待つばかりでした。

十月二日頃、全員また集合して帰還列車が到着  
すると食糧などの物資を積み込み、途中が不安で  
したが、無事釜山駅に到着しました。米兵監視の  
下で物品検査があり、時計などは巻脚絆にかくし  
て乗船しました。しかし台風接近のため待機させ  
られ、ようやく出航しましたが船の揺れはだんだ  
んひどくなります。上陸は仙崎港と連絡があり、  
いろいろ内地の状況を想像しつつ窓から外を眺め  
ると、白波が立ち、遠くに大きな船が反対方面に  
引き返すのが見えます。

ある戦友が壁に吊るしている編上靴がゆれるの  
を見て、左右四十五度までになると危ないぞとい  
う。夜が明けると船は昨夜の台風のこととは知らん  
顔でゆっくり進んでいる。早速、甲板に上がると  
かすかに右手に白浜が見えました。

戦友が「持山、博多者じゃろうが分からんヤ」。  
よくよく見ると白赤の防波堤の突端が見え出した。  
「ヤッパ博多ぜ！」台風に流され仙崎に入港の予  
定が博多になったのです。

DDT散布や検疫のため一夜船中に滞在、翌日午後上陸、須崎引き込み線の所で物資の分配があった。遠い者は米一斗と、私は五升かついで別れました。

両親は香椎にいらっしゃるかと不安ながらも小雨の中を家に着きました。父母は七輪を囲んで夕食後だったのでしよう台の上には大豆がありました。「今帰って来たバイ、乾パンと米ば持って来たケン」。

八月十日、ソ連が宣戦布告の時、会寧出發が一日でも遅れていたらソ連に連行抑留され、今日の私はどうなっていたら。人生には運が三度有るとかいますが私は予科練で不合格、次は水路部での父からの「ウナカエレ」の電報、現役ではH部隊長の決断がありました。

昭和二十一年一月二日、武装解除の際の部隊長の訓示の通り、山九運輸隊にて進駐軍の一労務者として働きました。水陸両用トラックで西戸崎の

食糧運搬でした。何と豊富な物資、さすがはアメリカだと思いました。作業は貨車内の作業で盗みが多く、監視が厳しくMPの巡回は不愉快なもので身体検査までやらされました。休業の時は故郷の島作業です。

また、県内より須崎に集積した砲弾を玄界沖に投下処理作業に十人で加わりました。また米軍の一千ポンド爆弾を起重機で大型トラックより降ろした際、下の歯止めがずれ、私は起重機と爆弾との間にいたのです。少しでも起重機が動けば骨折するところでした。

玄界沖の作業は十八回出動しました。この作業数は労務者中最多で、この作業は一応これで見切りを付け、その後は県内の兵器や砲弾の探知と集積作業に従事しました。西戸崎より孤島沖ノ岳山頂要塞より綿火薬弾を海岸までロープで引き降ろし、舟艇に積み込む作業をやりました。

## 【解説】

体験記筆者は、今次大戦における労苦の体験記中で三つの幸運を上げている。

一つは、予科練志願時の幸運である。大東亜戦争の開戦と共に軍事色が強まる中で、級友と、親の了解なしで予科練を志願したが、入隊後の適性検査で右眼が虹彩炎による視力がないというところで、憧れの七つ釦を着用しないで帰宅したこと。

二つには、学校で薦められた海軍水路部へ就職したが、この水路部での仕事は、気球を上げて風向、風速等を観測して気象、海象を把握することであった。勤務しているある日突然、父より「ウナカエレ」との電報がくる。帰宅すると知人から「水路部では太平洋上の離島など、どこに勤務するか判らんぞ」といわれたことから、父が私を呼び戻したということ。

最後は、海軍飛行機の部品を作る軍需工場で

開設された「幹部技術養成所（幹技生）」に入校しているうちに、朝鮮第一〇四部隊に入隊する。ここでは終戦間際のソ連軍の侵攻があり、勤務地、会寧出發が一日でも遅れているとソ連に連行抑留されていた。時の部隊長の決断が、第三の危機を救ってくれたという。

このように、三つ目の幸運は北朝鮮からの脱出であった。

当時、ソ連軍の北朝鮮方面への侵攻は、八月九日未明の水流峯方面から、豆満江慶興橋梁を突破して北朝鮮への侵攻に始まる。そして十日には雄基及び羅津に上陸し、このため豆満江下流にあった混成第一〇一連隊は会寧方面に後退し、羅津要塞守備隊はソ連軍に抵抗しつつ十八日には古茂山に後退し、その時に連隊は停戦命令を受領している。

体験記筆者の所属部隊は、第十四航空教育隊



ではないかと推定されるが、前記の会寧付近へのソ連軍の侵攻が最も至近のソ連軍侵攻の体験であったと思われる。

筆者らは、ソ連との交戦を知ると、早くも南下を開始し、十月二日頃、帰還列車に食糧などを積み、無事釜山駅に到着している。

終戦後、ソ連支配地区としての北朝鮮からの引き揚げた人数を見ると、次のようになっていく。

陸軍軍人	二五、一五一	人
海軍軍人	二三六	人
民間人	二九七、一五九	人
計	三二二、五四六	人

総計約三十二万人を数えるが、この北朝鮮からの引揚者の九一％は、ソ連の送還開始前に、苦難を重ねつつ陸路三十八度線を突破して、南朝鮮地区に脱出してきた人びとである、との記録がある。

## 北朝鮮より比島の想い出

福島県 田 沢 精 司

昭和十六（一九四一）年五月に徴兵検査にて甲種合格となり、羅南の山砲兵に入隊のため十二月八日出発することになっておりました。前夜に、大勢の方々に武運長久のお祝をして戴き、翌八日の朝出発することになっておりました。これまでは駅まで大勢の方々に見送られるのが慣例でしたが、この日の黎明、日本海軍の真珠湾の奇襲攻撃によって大東亜戦争が開始されたので、見送りはできなくなつたそうです。そのため家からは親族代表一人、部落からも一人ということで、喜多方駅まで送られました。

郡山駅前には午後一時集合となっていたので、時間までには全員集合しました。そして朝鮮・羅南の山砲隊より指揮官が来郡され、その命令指示に従い郡山駅前通りの旅館に一泊となり、そこで